

Ⅱ 授業実践

主体的に探究する児童の育成 ～共に学び合い、伝え合う国語科の授業づくりを通して～

第6学年 国語科 学習指導案

日時 令和7年10月14日(火) 第5校時
場所 温知学舎 世田谷区立烏山小学校
学級 第6学年2組 33名
授業者 松本 あゆみ

1 単元名 作品の世界を想像しながら読み、考えたことを伝え合おう

教材名 「やまなし」
「イーハトーヴの夢」

2 単元の目標

- 文章の構成や展開、文章の種類や特徴、比喩や反復などの表現の工夫に気付くことができる。
- 表現の効果を考えながら、物語の全体像を具体的に想像することができる。
- 作者が題名や作品にこめた思いについて考えをもち、伝え合うことができる。

3 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
① 文章の構成や展開、文章の種類とその特徴について理解している。(1)カ) ② 比喩や反復などの表現の工夫に気付いている。(1)ク)	① 物語の全体像を具体的に想像したり、表現の効果を考えたりしている。(C(1)エ) ② 作者が作品に込めた思いについて、叙述や読書経験に基づいて自分の考えをもっている。(C(1)カ)	① 粘り強く物語の全体像を具体的に想像したり、表現の効果を考えたりして、学習の見通しをもって作品世界について考え、伝え合おうとしている。

4 単元について

(1) 教材について

本教材『やまなし』は、作者宮沢賢治の深い思想性が表れているといわれる作品の一つである。また、擬声語・擬態語、造語、色彩表現、比喩などの賢治独特の言葉の響きの美しさ、不思議さ、魅力にあふれている作品でもある。読者が想像力を膨らませ、その世界を豊かに広げるための言葉がちりばめられている。中でも、「クラムボン」「イサド」「かぷかぷ」「ぼかぼか」などといった独特の造語は、読者には何を指しているのか明確にならない。この分からないことが面白く、自由に想像して自分流に楽しむことができる作品である。

しかしながら、児童にとってこの独特な表現が読み取りを難解にしている面がある。したがって本教材の指導に当たっては、①表現の工夫に着目し2つの場面を比べながら想像したり、②資料『イーハトーヴの夢』を読んで作者宮沢賢治の生き方や考え方に触れたり、③他の賢治の作品を読み世界感を味わったりすること等、様々な視点から賢治の世界を読み味わう方法を学ぶことができるように学習を進めたい。

また、こうした学習を通して、賢治の作品をどう読んで何を感じ、何を考えたのかを文章にまとめ、友達と交流する読書会を単元のゴールとした。『やまなし』を読むことで身に付けた、見方・考え方を働かせ、自身の感じ方と共に評価するという論理的な思考を伴う活動としていきたい。

(2) 教材文の分析

冒頭「小さな谷川の底を映した、二枚の青い幻灯です。」と終末「私の幻灯は、これでおしまいでありませう。」という作者である宮沢賢治の一人称視点で書かれた外枠と、三人称の客観的な視点で描かれた「五月」と「十二月」の2枚の幻灯が描かれた「額縁構造」の構成となっている。谷川の底からみた水中世界が、「五月」と「十二月」とを対比させながら、宮沢賢治独特の色彩豊かな表現で描かれている。これらの構成・表現の面から作品世界を捉えさせたい。

小さな谷川の底を写した、二枚の青い幻灯です。			
	五月	12月	
川の底の様子	青白い水の底 あわや小さなごみからは、まつすくなかげの棒が そのかげは、黒く静かに底の光のあみの上をすべりました。	冷たい水の底 白いやわらかな白石も転がってき、小さなきりの形の水晶の粒や金雲母のかけ らも、流れてきて止まりました。 横歩きと、その黒い三つのかげ法師が、合わせて六つ、おどるようにしてや まなしの円いかけを追いました。	
川の中の様子	青く暗く銅のよう 水銀のように光って（かにの吐いた泡） 魚が、黄金の光をまるつきりめちやくちやにして 銀の腹をひるがえして（魚）	あんまり月が明るくきれいなので、ねむらないで外に出て、しばらくだまって 辺りはしんとしていて、いかにも遠くからというように、波の音がひびいてく るだけ 月明かりの水の中は、やまなしのいいにいいでいっぱい	
水面の様子	なめらかな天井を、つぶつぶ暗いあわが流れていきます。 それつきりもう青いものも魚の形の見えず あわといっしょに、白いかばの花びらが天井をたくさんすべつてきま した。	波が青白い火を燃やしたり消したりしているよう やまなしは横になって木の枝に引かかかって止まり 青白いほのおをゆらゆらとあげました。金剛石の粉をはいているよう	
光の様子	日光の黄金は、夢のように水面に降ってきました。 波から来る光のあみが、美しくゆらゆらのびたり縮んだりしました。 光のあみはゆらゆら、のびたり縮んだり、花びらのかげは静かに砂を すべりました。	ラムネのびんの月光がいつぱいにすき通り 日光のにじがもかもか集まりました。	
おちてくるもの	カワセミ 青光りのまるできらきらする鉄砲玉のようなもの コンパスのように黒くとがっている 「魚かい。魚はこわい所へ行つた。」	やまなし トブン きらきつらと黄金のぶちが光りました 黒い丸い大きなもの。いいにいいでいっぱい 「もう二日ばかり待つとね、こいつは下へしずんでくる。それから、ひとりで においしいお酒ができるから。」	
かにの子供らの心	二ひきはまるで声も出ず、居すくまってしまいました 「こわいよ、お父さん」	おどるようにして、やまなしの円いかけを追いました。 「おいしそうだね、お父さん」	
オノマトペ	かぶかぶ笑ったよ つぶつぶ暗いあわが ぼつぼつと、あわをはきました	ぼかぼか流れていくやまなし 水はサラサラ鳴り 月光のにじがもかもか集まり	
私の幻灯は、これでおしまいです。			

（３）児童の実態について

高学年では、「読むこと」の領域での文学的な文章では、第５学年で「たずねびと」、「大造じいさんとガン」、第６学年で「帰り道」を学習してきた。作品を読んで表現の特徴を考えたり、人物像や作品の全体像を捉えて自分の考えをまとめたりする学習を重ねてきた。

学級の児童は、７割が「読書が好き・どちらかといえば好き」と答えていて、８割以上の児童が「物語文教材の授業が好き」と答えている。その理由として、「説明文より感情移入しやすいから」「ワクワクハラハラするから」「友達との交流で様々な読み取りができるから。」と答えている。

また、「自分の考えと友だちの考えの違いを意識して話し合いをし、考えを広げることができますか」という質問には、ほぼ１０割の児童が「広げている」と回答している。これは、入学以来、「めあてに向かって協働的に学び合う」学習が身に付いていることの表れであると考えられるが、反面、自分自身で考えをもつことにもう少し粘り強く取り組んでほしいと思う場面もある。また、「振り返りを行うことで、自分の課題や学習のポイントに気付くことができますか」という質問には、９割の児童が「はい」と答えている。

そこで、「分かりにくい」と不安を感じるであろう本教材を、これまでに学習してきた様々な方法や手段、経験を生かして、学習に対する前向きな姿勢を維持し、「分かるようになる」喜びを実感できるようにしたいと考えている。また、授業の最後に学習の振り返りを行うことで、自身の学びの調整、次時のめあてをもつこと、学習計画に対する達成度を実感することにつなげたい。

5 めざす児童像との関連

高学年の目指す児童像 「自らの学びを自覚し、生かしながら取り組める子」

高学年では、「自らの学びを自覚し、生かしながら取り組める子」を、①それぞれの強みを発揮して、全員が自分の学びに向かおうとする姿、②友達の見方、考え方を理解し、自分なりに選択、判断していく姿と捉えている。

この姿を実現するためには、価値ある問い（めあて）を設定し、一人一人がゴールに向かい続ける意欲や学びの必然性をもたせること、個人や友達との対話、全体での話し合い等適切な学びの場や環境の設定、ファシリテーターとしての教師の適切な関わりや工夫、「振り返り」を活用し、児童がその一単位時間で何を学び取ったか実感できるようにし、ゴールに向けて学びを調整すること、を意識して学びを支援できるようにしたい。

6 研究の手立て

（１）粘り強く教材と向き合うための工夫

① 単元構成の工夫

第一次で教科書の『やまなし』を読んだり、教員たちの読書会の様子を見たりして、宮沢賢治の作品に出合う。この時の「わからなさ」や解釈のずれを共通の価値ある問いとしていきたい。その解決のために、資料『イーハトーヴの夢』を読み、賢治の生き方や考え方や人となりについて知ることや、賢治の独特の表現方法や情景描写をより具体的に読み進めることの必要性に気付かせ、主体的な学習計画作りにつなげられるようにする。第二次では、実際に『イーハトーヴの夢』を読んだり、『やまなし』の本文とじっくり向き合ったりして、賢治の作品を楽しめるようにしたい。後半では、二つの場面が対比的に描かれている物語であるにもかかわらず、題名が『やまなし』となっている意図を考えることによって、作者賢治のこの作品への思いや願いに気付かせる。第三次では、宮沢賢治の作品のおもしろさや、「わからなさ」を伝え合うことで、単元を通して賢治の作品を読み、魅力を伝える読書会をしようという活動を設定した。

② 教員の読書会による宮沢賢治の世界との出会い

教科書の巻末資料に作品の一部分が紹介されている宮沢賢治の『グスコーブドリの伝記』を読んだ学年教員三人の読書会の動画を見せる。これによって、宮沢賢治の作品の世界観や魅力の一端を伝え、賢治の作品への興味や親近感をもたせたいと考えた。また、「賢治の作品を読んで読書会をしよう」というゴールの活動を明確にイメージすることができると考えた。

③ 初発の感想の活用

これまでの読書経験から、この「やまなし」に表れている作者宮沢賢治の独特の世界をイメージしにくい児童が多いと予想される。この感想を十分に共有することで、「わからなさ」や友達との解釈のずれを大切にし、単元を通しての学習意欲や学習計画づくりにつなげたい。

④ 「五月」と「十二月」の幻灯の様子を比べながら読む

季節の異なる二つの幻灯を、独特な擬態語や比喻表現に着目し、イメージを膨らませて対比しながら読むことによって、それぞれの場面の様子の違いをより鮮明に豊かに想像させたい。また、こうした言葉や表現の魅力に気付き、丁寧に読む楽しさを味わうことができるようにさせたい。そのため、「五月」と「十二月」の場面を一単位時間ずつじっくり読み味わう単元構成にした。「五月」の場面を丁寧にしっかり読むことで、「十二月」の場面を、「五月」と比較しながら読むことにつながるであろう。また、「十二月」の後半にしか登場しない「やまなし」が題名となっている理由を考えることに自然とつながっていくと考えている。

（２）自らの学びを自覚し、自己調整するための工夫

① 関連図書の並行読書

単元の学習期間中、作者宮沢賢治の様々な絵本や単行本、漫画などのラックを廊下に設置し、たくさんの作品に触れさせ、賢治の世界に楽しむことのできる児童を増やしたい。また、独特な表現や言葉遣いから情景を想像したり、物語の世界に浸ったりすることの難しい児童にとって、何とか自力解決する手段として、教科書の挿絵と共に絵本を活用したい。

② 自己調整するための時間の設定

授業の最後に自身の学びを振り返り、自己調整したり次時のめあてをもったりすることができるようにする。また、一単位時間の中盤、2人組での対話をした後にも、考えを再構成したり調整したりする時間を取り、自身の学びを再構成する機会を設定した。

7 学習指導計画（全 1 1 時間）

過程	○ねらい	○主な学習活動 ・予想される子どもの反応	◇指導上の留意点 ★評価規準（方法）
第一次	1. 物語を読み、話の大体をとらえ、自身の学習の課題に気付くことができる。	<div>『やまなし』を読んで、どのような学習をしたらよいか考えよう。</div> <ul style="list-style-type: none"> ○『やまなし』の範読を聞く。 ○『やまなし』を音読する。 ○印象や感想を共有し学習の見通しをもつ。 <ul style="list-style-type: none"> ・よく分からない。 ・言葉遣いが独特。 ・2枚の幻灯＝2つの場面がある。 ○初読の感想を書き、共有する。 ○「上」「下」の読み、送り仮名などを確認し、正しく読めるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ◇「好きなところ」「難しかったところ」「これから学習の課題にしたいところ」等、項目に分けて書くようにする。 ★【主体的に取り組む態度】宮沢賢治の作品に興味をもち、学習の見通しをもとうとしている。（記述・発言） ◇漢字の読み方を確認しながら、川の中の様子やかにの子からの目線を確認する。
	2. 関連読書の話から、宮沢賢治の世界を味わい、学習の見通しをもつことができる。	<div>宮沢賢治の作品に触れ、学習の見通しをもとう。</div> <ul style="list-style-type: none"> ○『グスコーブドリの伝記』読んだ教員たちの読書会の様子を見て、賢治の作品世界を知る。 ○教科書 P266 の『グスコーブドリの伝記』と『風の又三郎』の一部を音読する。 ○『やまなし』を正しく音読する。 	<ul style="list-style-type: none"> ★【主体的に取り組む態度】宮沢賢治の作品に興味をもち、学習の見通しをもとうとしている。（記述・発言）

	<p>3. 学習の課題や学習計画を立て、単元の見通しをもつことができる。</p>	<div data-bbox="464 80 1355 141" style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">『やまなし』の学習計画を立てよう。</div> <p>○前時に明らかになった課題を振り返り、どうすることが、この作品を理解することにつながるのか、考える。</p> <p>〈計画〉</p> <p>① 『やまなし』を知る。</p> <p>② 作者宮沢賢治について知ってみたい。 →『イーハトーヴの夢』を読んで、賢治の人生を整理して、理想や夢について考える。</p> <p>③ 他の本も読んでみると何か分かりそう。 →「賢治のトランク」を参考に、並行読書続け、読みの手段の一つにする。</p> <p>④ 表現が独特でよく分からない。 →独特な表現の美しさや面白さに着目してイメージを広げてみる。</p> <p>⑤ 「五月」と「十二月」を比較しながら読み、似ているところと違うところを整理し、それぞれの季節の特徴を捉える。</p> <p>⑥ 題名が、12月にしか出てこない「やまなし」となっている理由や、賢治の生き方などを関連させて、作者のメッセージを考える。</p>	<p>◇「分からない」ものに対して、恐れすぎたり諦めたりするのではなく、「分かるようになることを楽しむ」ことを学ぶ単元であることを伝えていく。</p> <p>◇児童からの感想や疑問点、課題にしたいことなどの言葉を丁寧に拾い、整理しながら、学習計画づくりを行う。</p> <p>◇「学び方を学ぶ」単元にするために、また、より読みを深められるように、全体で統一の計画とする。</p> <p>★【主体的に取り組む態度】宮沢賢治の作品に興味をもち、学習の見通しをもとうとしている。(記述・発言)</p>
第二次	<p>4. 『イーハトーヴの夢』を読み、賢治の人生や考え方について考えることができる。</p>	<div data-bbox="411 887 1347 940" style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">宮沢賢治はどのような人生を歩み、考えたのだろうか。</div> <p>○『イーハトーヴの夢』を読み、サイドラインを引きながら、賢治の人生や思想を整理する。</p>	<p>◇サイドライン 青…賢治が悩んだこと 黒…悩みを解決するための行動 赤…賢治の理想の生き方</p> <p>★【思・判・表②】資料を整理したことから、宮沢賢治の生き方や理想、考え方について考えている。(記述・発言)</p>
	<p>5. 「五月」と「十二月」の場面を簡単にまとめ、物語の世界を具体的に想像することができる。</p>	<div data-bbox="427 1252 1318 1312" style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">『やまなし』はどのような構成で書かれているのだろうか。</div> <p>○文章の構成を図式化して、全体をとらえやすくする。</p> <p>○作者独特の表現や言葉、表現の面白さや美しさに気付いたところや心惹かれたところに印をつけ、次回以降の学習に生かせるようにする。</p>	<p>◇最初と最後の一文を額縁、中の「五月」と「十二月」の場面を額縁の中にある場面ととらえて、全体の構造を図式化して読むことができるようにする。</p> <p>★【知識・技能①】文章の構成や展開、文章の種類とその特徴について理解している。(記述・発言)</p>
	<p>6. 「五月」の情景を具体的に想像することができる。</p>	<div data-bbox="427 1617 1318 1675" style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">「五月」の幻灯にはどのような情景が映っているのだろうか。</div> <p>○「五月」の場面の様子を想像し、ノートに自分の考えを書く。(文章・イラスト等で)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・川の水や光の様子 ・かにかの様子 ・上から来たもの ・魚が去った後の様子 <p>○対話する。</p> <p>○全体で発表し合い、まとめる。</p>	<p>◇本文の叙述や並行読書の経験に即して、場面の情景や出来事を読み取る。</p> <p>◇表現方法は、各自に委ねる。</p> <p>◇様々な視点ごとに対話する。</p> <p>★【思・判・表①】「五月」の様子や出来事を具体的に想像したり、表現の効果を考えたりしている。(記述・発言)</p> <p>★【知・技②】比喩や反復などの表現の工夫に気付いている。(記述・発言)</p>

	<p>7. (本時) 「十二月」の情景を「五月」と比べながら具体的に想像することができる。</p>	<div data-bbox="427 85 1318 143" style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;"> 「十二月」の幻灯にはどのような情景が映っているのだろうか。 </div> <p>○「十二月」の場面の様子を想像し、ノートに自分の考えを書く。(文章・イラスト等で)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・川の水や光の様子 ・かのにの兄弟の様子 ・上から来たもの ・やまなしを追うかのにの親子や川の様子 <p>○対話する。 ○全体で発表し合い、まとめる。</p>	<p>◇本文の叙述や並行読書の経験に即して、「五月」の場面と比較しながら「十二月」の情景や出来事を読み取る。</p> <p>◇表現方法は、各自に委ねる。 ◇様々な視点ごとに対話する。</p> <p>★【思・判・表①】「十二月」の様子や出来事を具体的に想像したり、表現の効果を考えたりしている。(記述・発言)</p> <p>★【知・技②】比喻や反復などの表現の工夫に気付いている。(記述・発言)</p>
	<p>8. 題名について話し合うことを通して、作品の世界を捉えることができる。</p>	<div data-bbox="427 631 1318 689" style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;"> 宮沢賢治は『やまなし』にどんな思いをこめたのだろうか。 </div> <p>○「五月」の場面のかわせみでもクラムボンでもなく、なぜ、「十二月」のやまなしなのか考える。</p> <p>○この物語に賢治が込めた思いを、賢治の生き方や考え方と関連付けて考える。</p>	<p>◇「五月」と「十二月」の場面对比的にまとめ、「十二月」のやまなしが題名となっている理由を考える。</p> <p>★【思・判・表②】題名について考え、作者が作品に込めた思いを考えている。(記述・発言)</p>
<p>第三次</p>	<p>9. お気に入りの作品の魅力について考えを広げ、伝える文章を書くことができる。</p>	<div data-bbox="427 963 1318 1021" style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;"> 読書会をして賢治の作品の魅力を伝えよう。 </div> <p>○これまで読んできた宮沢賢治の作品の中からお気に入りの一冊を選ぶ。</p> <p>○作者が作品に込めた思いを考えながら作品の魅力を伝える文を書く。</p>	<p>◇お気に入りの作品を探せていない児童向けに、あらかじめ本を紹介しておく。</p> <p>『銀河鉄道の夜』『注文の多い料理店』『セロ弾きのゴーシュ』『風の又三郎』『どんぐりと山猫』</p> <p>◇これまでに学んだ賢治の生き方や理想、読んできた物語とも関連付けながら、「魅力」を伝えるよう支援する。</p> <p>★【思・判・表②】自分が決めた作品を読み、既習の視点を生かして魅力についての自分の考えをもっている。(記述)</p>
	<p>10. 読書会で主体的に交流し、賢治の作品をより味わうことができる。</p>	<p>○書いた文章を用いてグループごとに読書会を開く。</p> <p>○単元の学習全体を振り返り、学んだことや成長したことを自覚する。</p>	<p>◇同じ本を読んだ児童同士、違う本を読んだ児童同士など、グルーピングを工夫する。</p> <p>★【主体的に取り組む態度】自分が選んだ作品について魅力を伝えたり、友達の文章から宮沢賢治の作品の良さを味わったりしている。(記述・発言)</p>

8 本時の学習（ 7 / 10 ）

（１）ねらい

- 表現上の特色に着目しながら「十二月」の場面を読み、表現の効果を考えたり谷川の情景を具体的に想像したりすることができる。

（２）展開

時間	○学習活動 ・ 予想される児童の反応	◇指導上の留意点 ★【評価】（方法）
導入 5分	<p>○前時までの振り返りをする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 私、作者、宮沢賢治が見ている幻灯。 ・ イーハトーヴの小さな川の中が舞台。 ・ 「五月」の場面を振り返る。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <ul style="list-style-type: none"> ・ かにの兄弟ののんびりとした様子。 ・ 暗かった川の中がぱっと明るくなった。 ・ きらきらと輝く透き通った水の中の様子。 ・ かにの兄弟がクラムボンの話をしていた ・ かわせみが飛び込んできて魚がとられた。 ・ かにの兄弟にとって怖い体験。 </div> <p>○本時のめあてを確認する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;"> めあて 「十二月」の幻灯にはどのような情景が映っているのだろうか。 </div>	<p>◇場面の確認だけでなく、どの表現からどのような想像をしたのかという視点でも振り返り、本時につなげる。</p>
展開 35分	<p>○言葉に着目し、「十二月」の世界を「豊かに想像する」ことを確認し、個人で自分の読みをまとめる。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>〈気付かせたい表現・言葉〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ かにの子どもらはもうよほど大きくなり ・ 夏から秋の間にすっかり変わりました ・ 白いやわらかな丸石 ・ 小さなきりの形の水晶のつぶや金雲母のかけら ・ ラムネのびんの月光 ・ 天井では波が青白い日を燃やしたり消したりしているよう。 ・ 辺りはしんとして、ただいかにも遠くからというように、その波の音がひびいてくるだけ。 ・ あんまり月が明るく水がきれいなので ・ かにの兄弟のあわ吹き競争の様子 ・ そのとき、トブン。 ・ 天井から落ちてずうっとしずんで、また上へ上っていきました。 ・ きらきらと黄金のぶちが光りました。 ・ 首をすくめて ・ 遠眼鏡のような両方の目をあらんかぎりのばしてよくよく見てから。 ・ そこの月明かりの水の中は、やまなしのいいにおいでいっぱい。 ・ ぼかぼか流れていくやまなし。 ・ おどるようにして ・ 水はサラサラ鳴り、天井の波はいよいよ青いほのおを上げ、 ・ 月光のにじがもかもか集まり ・ よく熟している。いいにおい。 </div>	<p>◇2つの場面を比較しながら読みを深められるようにする。</p> <p>◇これまでに探してきた作者独特の言葉や表現の中で、自分にとって気になるものや心に残ったものをどのように感じたか、書けるようにする。</p> <p>◇これまでの並行読書の経験も、読みの根拠とする。</p> <p>◇絵本や教科書の挿絵も参考にしてよいことを伝える。</p> <p>★【知・技②】比喩や反復などの表現の工夫に気付いている。（記述・発言）</p>

	<ul style="list-style-type: none"> ・ひとりでおいしいお酒ができる。 ・いよいよ青白いほのおをゆらゆらと上げました。 ・金剛石の粉をはいているよう。 <p>○二人組で対話をし、友達と共有し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分の学びを振り返り、メモ、加筆などして調整する。 <p>○全体で話し合い、「十二月」の場面の想像を広めたり深めたりする。</p>	<p>◇自分が気になった場面（表現）ごとにスペースを分けて、対話の視点が共通するようにする。</p> <p>前半の川の様子／かにの子どもらの様子 やまなしの様子／後半の川の様子</p>
まとめ 5分	<p>○めあてのまとめをする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・十二月は、冷たい透き通った川の中にやまなしが自然と落ちてきて、暗い中にも温かみのある情景である。 ・十二月は、かにの子どもたちも大きくなっていて、いい香りのやまなしが落ちてくることによって、自然の恵みを感じている。 <p>○学習の振り返りをする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・めあてに対して ・学びが深まったか ・新たな気づきや発見 ・次時に向けて 	<p>◇本時の学びを参考に、「十二月」がどのような様子だったのか、自分なりの言葉でまとめを書く。</p> <p>★【思・判・表①】「十二月」の場면을具体的に想像したり、表現の効果を考えたりしている。（記述・発言）</p>

（３）評価の基準

Aの児童の学びの姿	Bの児童の学びの姿	Bの基準に高めるための手立て・支援
<ul style="list-style-type: none"> ・様々な視点から、「十二月」の幻灯を豊かに想像し、自身の言葉で言い表している。 ・友達との対話や話し合いを通して、自身の考えを深めたり広めたりしている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「気になる表現」を三つ程度選び、どのように感じたか、読み取ったか、書いている。 ・友達との対話や話し合いを通して、自身の考えをまとめている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・独特な擬態語や比喩表現になじめない児童には、「かわせみ」や「やまなし」など具体物に着目させ、どのような様子なのか想像させるようにする。 ・その際、絵本や教科書の挿絵も参考にすることを勧める。

（４）板書計画

まとめ	話し合い	
		十二月全文シート拡大
		【板書計画】 めあて 「十二月」の幻灯にはどのような情景が映っているのだろうか。

全文シート

組番名前

「何が悪いことをしてゐるんだ、取つて来んだよ。」
「うん」
そのお魚が、まじからちとつてました。今度はゆくり寄を着いて、ひれをかき、尾を動かす。ただただ流れ流れたながら、お口輪の土に内くしややつてきた。また、そのかげには黒い静かに水の光のあの上をすりよりました。
お魚は「うん」
そのときです。「わかたけ井に白いきぬわが立て、青光りのまるとでくらさする鏡端までふもろもがいきなりそのいのちの先がゴンズのように黒くながつてゐるのを見ました」と思つても、魚の白目腰がさうと光ってらんひるかぎり、光の黄金へ上へたよつたけれど、あれは、お魚の形も見えず、二ひきはまるめて声も出ず、戻つてしまつてしました。
お父さんのかたが出て来た。
「どうだい？　今、おかしなものが來たかい？」
「お父さん！　今、おかしなものか來たかい？」
「青くねむり光なんだよ。はしが、こんなに黒くとがつてるの、それが來たら、お魚がかへ上つてきたかい？」
「そいつの目が赤かつたかい？」
「ぶんぶん、しろく、そいつの鼻だぶかわせむというんだ。だいいじぶんだ、安心しろ。お父さんは結構なんないんだから、お父さんとお魚ともお池にもへ行けたら、これい、お魚はこれい所へ行たかい？」
「これい、はいはい。だ、心配するな。それから、かばの花が流れしてきた、こらん、されたふう」
「それで、白いきぬ花びらが、天井をたくさんべつききました。これい、お父さん！　来てかにも見えました。光のあみゆめゆるらのひたり綿んだり、花びらのかげは静かに砂をすべりまして。

私の幻灯はこれでおしまいであります



私の幻灯は、これでおしまいであります



組	番	名前
1	1	山田 太郎
1	2	山田 次郎
1	3	山田 三郎
1	4	山田 四郎
1	5	山田 五郎
1	6	山田 六郎
1	7	山田 七郎
1	8	山田 八郎
1	9	山田 九郎
1	10	山田 十郎
1	11	山田 十一郎
1	12	山田 十二郎
1	13	山田 十三郎
1	14	山田 十四郎
1	15	山田 十五郎
1	16	山田 十六郎
1	17	山田 十七郎
1	18	山田 十八郎
1	19	山田 十九郎
1	20	山田 二十郎
1	21	山田 二十一郎
1	22	山田 二十二郎
1	23	山田 二十三郎
1	24	山田 二十四郎
1	25	山田 二十五郎
1	26	山田 二十六郎
1	27	山田 二十七郎
1	28	山田 二十八郎
1	29	山田 二十九郎
1	30	山田 三十郎
1	31	山田 三十一郎
1	32	山田 三十二郎
1	33	山田 三十三郎
1	34	山田 三十四郎
1	35	山田 三十五郎
1	36	山田 三十六郎
1	37	山田 三十七郎
1	38	山田 三十八郎
1	39	山田 三十九郎
1	40	山田 四十郎
1	41	山田 四十一郎
1	42	山田 四十二郎
1	43	山田 四十三郎
1	44	山田 四十四郎
1	45	山田 四十五郎
1	46	山田 四十六郎
1	47	山田 四十七郎
1	48	山田 四十八郎
1	49	山田 四十九郎
1	50	山田 五十郎
1	51	山田 五十一郎
1	52	山田 五十二郎
1	53	山田 五十三郎
1	54	山田 五十四郎
1	55	山田 五十五郎
1	56	山田 五十六郎
1	57	山田 五十七郎
1	58	山田 五十八郎
1	59	山田 五十九郎
1	60	山田 六十郎
1	61	山田 六十一郎
1	62	山田 六十二郎
1	63	山田 六十三郎
1	64	山田 六十四郎
1	65	山田 六十五郎
1	66	山田 六十六郎
1	67	山田 六十七郎
1	68	山田 六十八郎
1	69	山田 六十九郎
1	70	山田 七十郎
1	71	山田 七十一郎
1	72	山田 七十二郎
1	73	山田 七十三郎
1	74	山田 七十四郎
1	75	山田 七十五郎
1	76	山田 七十六郎
1	77	山田 七十七郎
1	78	山田 七十八郎
1	79	山田 七十九郎
1	80	山田 八十郎
1	81	山田 八十一郎
1	82	山田 八十二郎
1	83	山田 八十三郎
1	84	山田 八十四郎
1	85	山田 八十五郎
1	86	山田 八十六郎
1	87	山田 八十七郎
1	88	山田 八十八郎
1	89	山田 八十九郎
1	90	山田 九十郎
1	91	山田 九十一郎
1	92	山田 九十二郎
1	93	山田 九十三郎
1	94	山田 九十四郎
1	95	山田 九十五郎
1	96	山田 九十六郎
1	97	山田 九十七郎
1	98	山田 九十八郎
1	99	山田 九十九郎
1	100	山田 一百郎
1	101	山田 一百零一郎
1	102	山田 一百零二郎
1	103	山田 一百零三郎
1	104	山田 一百零四郎
1	105	山田 一百零五郎
1	106	山田 一百零六郎
1	107	山田 一百零七郎
1	108	山田 一百零八郎
1	109	山田 一百零九郎
1	110	山田 一百一十郎
1	111	山田 一百一十一郎
1	112	山田 一百一十二郎
1	113	山田 一百一十三郎
1	114	山田 一百一十四郎
1	115	山田 一百一十五郎
1	116	山田 一百一十六郎
1	117	山田 一百一十七郎
1	118	山田 一百一十八郎
1	119	山田 一百一十九郎
1	120	

十二月
十二日の子どもはもうほとんど大くくなり、底の景色も夏から秋の間にすっかり変わりました。
白いわやわかな丸石が転がつき、小さなきり形の水晶つぶや雪雲母のかけらも、流れてこま止まりました。
その冷たい水の底まで、おふさんのひびきの月光がこぼれにいき通じ、天井では液が青白い水を燃やしてうしろに消したたいていもう、辺りはしんとした、ただいかに速くとも速くとも燃やして、その炎の音がひびくのをきかなくては。
出たしほのともなうは、ある半月が明るく水がきれいな、わねわねするやうな、やほりほりした大くきくはてきてるんだ、ほくくだつてやとながらもつと大くきはけるよ。
兄さん、わさだの大くきはてきてるんだ、ほくくだつてやとながらもつと大くきはけるよ。
「はいてらん、おや、たまたそれきりだろう。いいかい。兄さんがはくから見てやう。」
「できかね、おやんないやう。」
「近くだらう。自分の大くきく大くきく見えるんだよ、そんならいつしよにはいてみよう。」
「いいかい、それら。」
「やほりほくくはう、大くきいよ。」
「本当かいし、もう一つはいいよ。」
「だめた、その人なにかのひがでては。」
「またお父さんのひがでては。」
「もうお父さんおきてや、あしをこいたと連れていかんぞ。」
「お父さん、ほくくおのれとあわとをきと大くきのほうだやう。」
「それは兄さんいふほうのほう、大くきいんだよ。」
「それしやないよ、ほくくはうのほう、大くきいんだよ。」
「そのかには近きそつにふなりになりまし。」
「そのこと、トフ、」
「黒い丸いきなもの、天井から落ちてうすうとしすんで、また上へ上へうていきまし、たきさきさうと黄金のぶちが光りました。」
「かませめた。」
「子どものかには、首をすめて言いました。」
「お父さんのかには、遠視鏡のような両の目をあらかきりのばして、よくよく見てやない、あれは首をまなした。流れいくぞ、いいてみよう。ああいかにうたない。」

そのお魚はまた上からもつてきました。今度はよくくりやうらぬきついてひれを尾も動かさず、ただたゞにだけ流れながら、おもへば輪のよこに打ちくちやつてきました。そのかけは黒い、静かに底光りのあの上をすりました。

「お魚は……」

そのときです。わかに井に白いあわが立て、青光りのもるでぎらぎらす鉄砲だまのうなほまじりといふやうな音（なり）が響（こ）んできました。

又さうしたうなほまじりといふ青い水がコンペツのよこに黒くとがり、上の方へ上つたように思つたが、魚の白目と腹がうろと光してゐるから見て、うら上方へ上つたようであつたけれど、魚の白目も青いものも魚の形も見えず、光の黄金のはきははゆめゆめ流れば、あわはまたぶつて流れました。

二ひきはまるで声も出ず、居るばかりでまつてしまいました。

お父さんのかが出てきて、「どうしたいかが出ています。」

「うしろしいかぶるふるえてゐるじゃないか。」

お父さん、今、おかしなのものが来たら、

「お父さん、どんなせん。」

「青くてね、光るんだよ。はしが、こんなに黒くかつてるの。それが来たぞ、お魚が上つて来るんだ。」

「そいつの目が赤かつたかい。」

「分らない。」

うらな、しかういふ時は、かわせみというんだ。だいじぶうだ。安心して、お魚たちは構はないんだかと。

「お父さん、お魚はどこへ行つた。」

「わうわ、お魚はい所へ行つた。」

「いいいい、だいじぶうだ。心配するな。そう、かげの花が流れてきた。ごらん、きれいだろう。」

「はい、はい、白いかげの花びらが、天井をたくさんすきました。ごらん、あれは、お父さん、弟がこれにも着きました。」

光のあひなゆめゆめ、のびたり縮んだり、花びらのかけは静かに砂をすべりまし

私の幻灯は、これでおしまいであります

ワークシート（第5時）

第二学年 国語科

やまなし

◇お話の図をかこう。

小さな谷川の底を写した、二枚の青い幻灯です。

一 五月

〈本文中の言葉〉

二 十二月

〈本文中の言葉〉

私の幻灯は、これでおしまいです。

第二学年 国語科

やまなし

◇お話の図をかこう。

小さな谷川の底を写した、二枚の青い幻灯です。

一 五月

二 十二月

〈本文中の言葉〉

〈本文中の言葉〉

私の幻灯は、これでおしまいです。

ふりかえりシート

名前

📖 並行読書をした本の題名と一言感想 📖

- 『 』
- 『 』

★ふりかえりの視点★

- めあてに対してどう学んだか。
- やまなしに対してどれくらい深まったか。
- 新たな気づき、自分なりの発見。
- 次の時間で、どのように学ぶか。

やまなし①
月 日
(ふりかえり)

やまなし②
月 日
(ふりかえり)

やまなし③
月 日
(ふりかえり)

やまなし④
月 日
(ふりかえり)

やまなし⑤
月 日
(ふりかえり)

やまなし⑥
月 日
(ふりかえり)

やまなし⑦
月 日
(ふりかえり)

やまなし⑧
月 日
(ふりかえり)

やまなし⑨
月 日
(ふりかえり)

やまなし⑩
月 日
(ふりかえり)

やまなし11
月 日
(ふりかえり)

単元全体を通して
月 日
(ふりかえり)

